

聖書:エペソ人への手紙1章15～23節

説教:キリストのからだである教会

はじめに

私たちは毎週教会に集っていますがどうしてそうするのでしょうか。そもそも教会とはどういうところなのか。今日はそのことについて考えていきます。

ところでペテロは、「パウロの手紙は理解しにくいところがある」という趣旨のことをほかのところで書いています。ペテロでさえパウロの文章は難しい。では私たちはどうするか。全部細かく見ていくのではなく、太い幹を中心に見ていくと見通しがよくなります。

1 心の目がはっきり見えるようになって

1) 神が与える望み

それで18節に注目します。「あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって」、これこれのことを知ることができるように祈っている。いったい何を知ってほしいのかということで、パウロは三つ挙げていて、それらはばらばらではなくて、全部同じものを指していることがわかってきます。一つ一つ見ていきましょう。

一つ目は、18節の真ん中にあります。「神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、（を知ることができるように）。」

ここに望みというのが出て来ます。私たちはいろいろな望みを持ちます。受験生であれば、あの学校に入りたいという望みがある。それで一生懸命目標に向けて勉強する。会社で働いている人は、「高い給料をもらうこと」が望みだと答えるでしょう。

では、神の召しによって与えられる望みとはなんでしょうか。

2) 御国を受け継ぐ

それが、パウロが祈ったことの二つ目のことで、18節の最後にある。「聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか。」神が与えてくださる望みとは、聖徒たちが受け継ぐもので、すばらしい栄光に富んでいるのだということです。では、受け継ぐものとはなにか。このことはすでに書いてあって、11節にあります。「またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。」御国というのがどんなにすばらしいところか、もっともっと知って欲しいとパウロは祈っている。

たとえば合格発表のときに自分の受験番号があつて、望んでいた学校には入れたら喜びます。会社で昇進したら幸せな気分になってお祝いしたくなる。しかしその幸せはいつまで続くでしょうか。時間が経つうちにだんだん喜びが薄れます。満足できなくなってまた次の新しい望みを考えだし、そのためにがんばる。人生そんなことの繰り返しで、どんどんストレスがたまっていく。それが世の人たちの姿です。

神が与える望み、私たちがやがて天の御国を相続するという望みですが、この望みはやがてかなえられると信じています。そこで考えてみたい。望みがかなえられた後、私たちはどんな気持ちになると思いますか。たとえばこうでしょうか。御国を相続したときは天にも上るくらい嬉しかった。けれどもだんだん感激が薄れ飽きてきて、もっと別の望みが欲しくなるのか。もちろんそんなはずはない。安心してください。あまりにも神の栄光に富んでいるところなので、飽きることはありません。

3) 神のすぐれた力

でもどうでしょうか。このようなすばらしい望みを与えられていると言われても、素直に喜べない。不安になるかたもいるでしょう。エリート・クリスチャンは天国に行けるけれど、私のような落ちこぼれは入れないかもしれない。では、パウロはなんと言っているか。それが三つ目。19節。

「また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。」これをよく読んでください。人間の努力とか、ひとりひとりの信仰のレベルとか、そういうことで評価するとは書いていない。書いてあるのは、「神の大能の力」ということばです。神の大能の力が働いているので、たとえ自分のことを落ちこぼれクリスチャンだと思ったとしても安心して天の御国を相続できる。そう書いてある。

2 神の大能の力とキリスト

1) 死者の中からよみがえらせた

では、「神の大能の力」とはなにか、ということになる。神は全能だからなんでもできる、そんなふうにはぼんやりとはわかるのですが、具体的に

はどんなことなのか。これも三つ挙げます。いずれもキリストに関わっています。一つ目が20節。

「この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせた。」以前も触れましたが、キリストがご自分で神の力を発揮して墓の穴からよみがえられた、そんなふうに誤解されている方がいます。大切なことなので一度繰り返します。そうではありません。父なる神が、大能の力をキリストに働かせたことにより、キリストは死者の中からよみがえられました。それと同じ大能の力を私たちにも発揮してくださって、天の御国を相続できるようにしておられる。いったいどのようにして発揮するのでしょうか。私たちも、キリストと同じように死からよみがえらせていただく。これがまさに神の大能の力によることです。

2) すべての名の上に置かれた

神の大能の力の二つ目。「すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」

ここに「名前」ということが出てきます。創世記の最初のところにありますが、神がこの世界を造られたときのことを思いだしてください。神が「光、あれ」と言われて光ができたとき、「神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた」とあります。存在するものには必ず名前がある。これが聖書の基本です。ですから、「すべての名の上に置かれた」ということは、この世界の存在するもののすべての頂点にキリストが立っておられ、キリストがすべてのものを御支配していることを意味します。そう言われると、キリストがなんだか手の届かない遠い存在に思えてしまいます。ほんとうはどうなのでしょう。

3) 教会に与えられた

神の大能の力の三つ目。22節。「また、神はすべてのものをキリストの足の下に従わせ、キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました。」

こんな小さな教会にも世界の頂点に立っておられるキリストが与えられる。あまりの落差にめまいがしてきそうです。そしてもう一つわかりにくいのは、神の大能の力ということばです。なんだか実感がわきません。もう少しよくわかるような方法を教えてほしいと思う方もいらっしゃるでしょう。

3 教会

1) キリストのからだ

そのヒントは23節にあります。「教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。」

ここにまた新たに「からだ」ということばが出て来ます。教会はキリストのからだですとよく言われます。どうしてパウロは「からだ」ということばをわざわざ使うのでしょうか。このことは4章で詳しく取り上げることになりますが、先取りして言えばこうです。

みなさんにはそれぞれからだがあります。からだは頭や手や足のようないろいろな器官からできていて、それぞれがうまいぐあいに協力しあってからだ全体の調和がとれるようになっている。よく考えたらすごいことです。これとおなじように、教会もひとりひとりがいろいろな器官であって、その器官であるみなさんがうまいぐあいに結び合わされて教会全体の調和がとれるようになっている。そうやって私たちはキリストのからだをかたちづけているのだと言われるのです。

2) 罪ある者が一つとなる

ここで大切なのは、うまいぐあいに結び合わされてということです。どうやったら結び合わされるのか。そもそも私たちは罪人だったのです。罪は人と人の関係を傷つけ、壊す方向に必ず作用します。そんな罪人がそのまま一つ所に集まったらどうなるか。世の集まりを見ればわかるとおり、うまくいっているように見えても、ほとんどの場合表面的な交わりで終わってしまいます。

では教会はどうでしょう。教会のかしらはキリストであり、キリストで満ちているところと言われています。それは何を意味するか。キリストの血によって私たちを罪から贖いだしてくださり、罪から解放してくださった。そんなお一人お一人が教会に集められている。以前は人を傷つけるだけの私たちが、キリストの十字架によって罪を赦されて、そこで初めて愛というものを教えら、こんどは人を愛する者に変えられていきます。そうして互いが結び合わされていく。そこには、感謝と喜びがあります。キリストのからだとはそのような姿です。

考えてみればこんな不思議なことはありません。なぜ一つになれるのか。さきほど、神の大能の力がわかりにくいと言いました。実は、今みなさんの中に働いているのです。もしこの教会が一つであるならば、キリストを死者のなからよみがえ

らた力、それと同じ力が教会に働いている証拠である。教会とはそういうところなのだということです。そのことがはっきり見えるようになりなさいとパウロは祈りました。もともとなかったのなら無理です。すでにあるから、こう言ったのです。

闇がますます濃くなる時代にあって、ますます教会の役割が大切になってきていると思います。大嵐で船が遭難し海に投げ出された人たちは望みを失っています。そんな人たちのために、教会が暗闇に輝くキリストの光を灯し続けていくのです。大能の力をもったキリストがしてください。